

どう考える？

どう動く？

ご本人らしい生き方にたどり着く

意思決定支援 のために



障害や認知症により、一人で物事をうまく決められない方と共に歩み、考え、

ご本人の意思を尊重した明るい未来を築いていく「意思決定支援」。

いろいろな支援現場の実例から学ぶ、そのポイントとは？

こんな時、あなたなら、 どうしますか？

知的障害があり、グループホームに暮らすFさんは、
ある日突然、「犬を飼いたい」と訴えてきました。

Fさんの気持ちを考えた時、
あなただったら、どのように対応しますか？

このグループホームは、
ペットを飼うことを禁止しています。



- ①グループホームでは犬を飼えないことを説明し、説得する
- ②グループホームにお願いして、犬を飼えるようにしてもらう
- ③「犬を飼いたい」真意を探り出して、それに合った対応をする

Fさんの場合、

③の対応をしたことで、解決できました

実は、Fさんは趣味で犬を飼いたかったわけではなく、
自分の居所に他人が勝手に入ってくるのが怖くて、
「犬を飼いたい」と訴えていたのです。

その後、居所の入り口にしっかりと扉をつけて施錠することで
Fさんは満足し、もう「犬を飼いたい」とは言わなくなったそうです。



この場合、もし①や②の対応をしていたら、どうなっていたでしょう。「犬を飼えない」ことを説得されても、Fさんが抱える根本的な不安はなくなりません。「犬を飼う」ことになっても、犬の世話をすることがFさんの本心ではないために、可愛がらず、「せっかく思いをかなえてあげたのに、世話もしないで、わがままな人」と思われてしまうかもしれません。また、同じような事例であっても、Fさん以外の人の場合は、①や②が解決策になることもあります。

これから取り上げる事例も、「〇〇さんの場合、こうしてうまくいきました」という一例です。

同じような課題でも、環境や対象者によって、違う解決策があるかもしれません。

“正解がないのが正解”というのが意思決定支援。 そのことを心に留めて、この小冊子を参考にして、よりご本人の気持ちに添った支援を考えていただけると幸いです。

障害や加齢による症状などの程度にかかわらず、
誰もが心の中にはしっかりとした意思をもっています。
判断できないのではなく、思いを形にするのが苦手なのかも。
うまく伝えられないだけなのかも。

時間がかかるからといって、第三者の思いや考えを押し付けない。
「今は決められない」という選択肢も大切にする。
表層的なことだけで判断せずに、
言葉にできないことがあるということも考える。

周りにいる人や地域が連携し、工夫すれば、
きっとその人の中にある真の思いに行き着くことができるはずです。

わたしたち一人ひとりが、意思決定支援のポイントを身につけて、
誰もが笑顔で暮らせる地域社会をみんなで作っていきましょう。

覚えておきたい 意思決定支援のポイント

ご本人が黙ったまま! ▶ 意思と選好についての情報収集と分析(アセスメント)…P.4～P.7

- 黙っているから意思がないわけじゃない。環境設定で、選びやすくなることもある。
- 意思決定する時の状況だけで判断しない。その人の経験や歴史、日々の生活スタイル等からの選択肢も用意する。
- 「こんなはずじゃなかった」と思われることを怖れて、何もしないで良い?
- その人の好きなこと、嫌いなことを知らないと、意思決定支援は始まらない。

言っていることが実現不可能! ▶ 意思決定支援のプロセス…P.8～P.11

- 言っていることが、その人の思いの全てではない。
- 意思決定する時の状況だけで判断しない。その人の経験や歴史、日々の生活スタイル等からの選択肢も用意する。
- 自分で選んだことが実現されると、それは力になる。

一人の判断で決めて良い? ▶ チームによるアプローチ…P.12～P.15

- 重要なことは何度も確かめる必要がある。
- 「ご本人が不安になっちゃうから、伝えないで」で、良い?
情報を伝える伝えないということも含めて、みんなで悩むことが大切。その上でご本人に相談する。
- 重要なことが分からない時、みんなで決める必要がある。

なんでも代わって決めて良い? ▶ 意思の推定と代行決定…P.16～P.19

- ご本人に代わって決めるのは、最後の手段。推定意思による決定が原則。
- ご本人の意思に基づいた決定がその人自身や他者を傷つける時には、異なる決定がされることがある。
- ひとつの課題に対して代行決定が必要となったとしても、次の意思決定の際には、「決める力がある前提」に戻る。

こんなことがありました

統合失調症があり、施設入所していたAさん。足を骨折したことから、リハビリも兼ねて、施設で行う体操教室に熱心に参加していました。

ある時、入所者を対象に、施設外に出かけるレクリエーションが催されることになり、新人の職員は骨折でしばらく外に出られなかったAさんに、外出の機会を作ってあげようとレクリエーションへの参加を促しました。しかし、レクリエーションの日程を確認しても、Aさんは黙り込んでしまうばかり。「きっと意味が分からないんだ」と考え、新人の職員はそれ以上Aさんに聞くことをやめてしまいました。



どう考える？

黙っているAさんは、
何も考えていなかったのでしょうか？

Aさんは、自分が言いたいことを
話しやすい環境だったのでしょうか？

もし、あなたがAさんと同じように、「どうせ分からないから」、
「後でこんなはずじゃなかったと言われるのが嫌だから」
と、何もしてもらえないとしたら、どう思うのでしょうか？

どう動く？

黙っているから意思がないわけじゃない。 環境設定で、選びやすくなることもある。

どれが正解か分からない時に、思っていることを最初から選ぶことは誰だって難しい。ましてや、障害のある人の場合、どうしたいか、うまく言葉にできないから黙っていることもあります。話しやすい場所を選んだり、言葉で伝えきれない場合は身振りや絵を使うなど、ご本人が意思を表しやすいように、工夫やサポートをしましょう。

意思決定する時の状況だけで判断しない。 その人の経験や歴史、日々の生活スタイル等からの 選択肢も用意する。

「家に帰りたい」と訴えていても、実は「家にある仏壇を放っておけない」ということが真意だったということもあります。また、ご本人なりの選択肢があっても、遠慮して伝えないことだってあります。ご本人から出てくる情報や新しく得た経験、これまでの意思決定の仕方なども踏まえ、発想を豊かに選択肢を用意しましょう。

「こんなはずじゃなかった」と思われることを怖れて 何もしないで良い？

「それって失敗しちゃうよね？」と思える選択だとしても、ご本人にとっては大切な経験になり、次の意思決定の機会に生かされることもあります。支援に関わる皆さんで話し合い、取り返しのつかないことにならないと考えられるのであれば、ご本人のチャレンジを支援するというのも選択のひとつと考えましょう。

その人の好きなこと、嫌いなことを知らないと 意思決定支援は始まらない。

元々ある好き嫌いの中に、答えが潜んでいることもままあります。日々のコミュニケーションの中から、まずそこを理解することがスタートラインと考えましょう。

Aさんの場合、その後は…

別の職員が、改めてAさんに「レクリエーションのことをどう思っているのか」を、
開かれた形で尋ね、思っていることを順序立てて確認。身振りや表情も気をつけて見ていくと、「体操教室を1回休むことで、また歩けなくなるのではないかと恐い」と思っていたことが分かってきました。そこで、レクリエーションに出ることと、レクリエーションには出ずに体操教室に参加することについて、それぞれのメリットとデメリットを並べて提示したり、大事な点を紙に書き出ししたりしながら繰り返し説明していくと、Aさんは、体操教室を1回休んでも、歩けなくなるような日常生活の変化がないことを理解して、レクリエーションに参加しました。

